

保育の過程における 教師とのふれあいについて

今尾 桂子



一、はじめに

私たちは一生のうちで、いつか、どこかで、自分というものをほんとうに理解してくれ、受けいれてくれる人に一人ぐらいは出会いたいと思う。そういう人のおかげでおそろしいことからのがれ、自信もでき、自分の道をまっすぐに歩んで行けるのだろうか。私は幼児たちにとって、一度でもいいから、そういうひとりになりたいたいと思っているが、その望みは遠くにありそうだ。

ほんとうに、ひとりひとりの幼児の感情を受けいれることはずいぶんむずかしい。特にこの頃、何か自分の保育に対して、これでよいのだろうかという不安感が頭をもたげているが、こういう教師の気持が私のクラスの幼児に、何かしら自信をなくすような気持がし、実践を通して私の指導に対する反省をしようと考え

た。

幼児が十分に活動を展開するためには、いろいろの経過をたどっていくのだと思われる。それは一日の保育の過程の中で考えられるだろうし、またそれは、それらの連続として変化していく幼児の発達ということの見通しの上になっても考えられるべきことであろう。これは、ある一日という時点にたった幼児についてもいえるし、発達ということを見通したある長期の時点でも考えねばならないだろう。

私はこの過程の中で、その時、その場の幼児の要求をどのように感じとり、それをどのように援助していったか。その受けいれ方で、幼児の感情や行動がどのように変わっていったかということとを、二つの例で考えてみた。

1 幼児と教師のふれあいの中で、幼児の要求をみきわめ、幼

児に安定感や自信がつけられたと思われる例。

- 2 教師があまりにも幼児どうしのかかわりあいの中での解決を望みすぎ、幼児の要求をうまく受けいれてやれなかったと思われる例。

二、実践例

1 自信のなかったAに対して

入園当初はいつもブランコは大盛況である。五月のこの日も一つのブランコに七、八人の幼児が列をつくり、二十ずつ教えたらが遊んでいるのを見ているか、粘土をいじっているかである。

そんなAがはじめてブランコの一番うしろに並ぶことができ、長い間待って、やっと自分の番がまわってきた。とてもうれしそうに、また恥ずかしそうに乗っていたが、すぐ降りなければならなかった。ちょうどその時、戸外での遊びの波もさがったようだし、あと二十分ほどで降園時間になるので、部屋にはいって紙芝居を見ることにした。

みんな静かにすわれたのだが、いつも後の方にひとりですわっているAが、きょうは一番前にきて、みんなが見えないように指をしゃぶって立っている。教師は「Aちゃん、そんなところに立

っていないですわりましょう」といったとたん、Aは「いつも先生のいうことばかり聞いてやるもんか」と近くの机の上に置いてあったブロックキャップを投げはじめたのである。他の幼児は今までおとなしかったAに驚いて、なにもいわずみんな私の顔を見ている。すごい勢いで投げつけてくるが他の幼児にあたらないように気をつけて、そのままに放っておいた。

それから毎日、私のいないところではしないのであるが、ホールで積木を投げたり、いすを倒して歩いたり、ブロックキャップを投げたりなど、教師の感情をためしているのだろうと思われるような行動をとった。こんな時は、Aに対して制限しようかというぶん迷ったが、今まで消極的だったAのことを考え、Aののがまんくらべをすることにした。そうしているあいだに、Aは教師をものとも思わなくなってしまうようである。

こんな行動が一週間も続いたある日、粘土でサンダーボード二号を作っていたAが、他の幼児から「変なかつこう」とけなされたため、その粘土をまるめてガラスや壁に向かって投げはじめた。ガラスは割れそうだし、これは困ったことだと考えながら小黒板を持ち出し、「Aちゃんって投げるのうまいのね、この的に当てられるかしら」と的を書いて、Aの前に出してみた。

するとAはすぐ的あてに興味を示し、一番内側が三点、まん中が二点、次が一点とひとりごとをいいながら数字を書きいれ、ひ

とりで的あてをはじめた。YやKがそれ見つけて「Aちゃん、ほかたちもいれて」とおそるおそる聞いている。

A「うん、いれたるわ、Yちゃん二番、Kちゃん三番やに」Aはとくいな顔である。ルールをきめてゲーム遊びが続ぎ、いつもにない明かるいAの表情をみることができ、ほっとした。こんな日々を経過してAには、教師はなにをしても受けいれてくれるのだ、自分は好きなことをしてもいいのだ、という自信ができたのだろうか。それからのAは他の幼児と同じような行動がとれるようになり、教師からの要求も受けいれられるようになって、この頃から指しゃぶりも少なくなったようである。

それ以後、まだときどき、自分の要求が友だちに受けいれられない時は、涙を出してわめいたことがあったが、暖かい気持で見守っていた。二期の運動会がすぎる頃には、Aの感情のあらわし方がかわって、自分から積極的に友だちをリードすることにより、自信をもった行動ができるようになった。お当番の時など特にその気持がよくわかった。

また音楽の好きなAはレコードを自分でかけることによって、情緒の安定をえているといった光景もみられたし、感情を粘土や砂場に体当たりして表現しているといったこともよくみうけられた。こうしてAは自分の感情の表現を、創造的な手段に変えていったようである。

(考察と反省)

以上のことから次のようなことが考えられる。

。今まで家庭で干渉され通しであったAにとって、幼稚園ではどうして遊んでよいかわからず、不安の状態が続いていた。もともと内気でなかったAは、本来の姿を教師に受けいれてもらえず、こんな行動が続いたのではなからうか。

。指をなめないでほしいといったことや、みんなといっしょに遊んでほしいといった要求が教師の心の中にあつたことも、その一つの要因でもあると考えられる。

。Aは、教師とは自分のどんな行動をも受けいれてくれるし、同時に、自分が大きな失敗をする前に、また敗北感をあじわう前にセーブしてくれる人だということを、ここで知ってくれたのではなからうか。

。前段階でAの行動を悪いことだと制限を与えていたら、Aは今のようなスムーズな行動はとれていなかったのではなからうか。

。Aのように自信のない不安定な幼児には、一時の衝動的な攻撃的な行動をとることによって自信をもち、そこから自分の感情をコントロールすることができるようになったのであろう。

。教師の助言が受けいられるには、幼児自身が自分の要求を

受けいられていると感じている時だけであろう。

2 自分をコントロールできなかったYに対して

Yはどんなことにも意欲的にとりくみ、グループのリーダーとして、いつも積極的に活動する幼児であるが、遊びに熱中すると友だちのことを考えず、自分の要求が満足するまでやりとげるのである。こんなYに接した時、自分たちの要求が満足できなかった他の幼児からの要求や、Y自身が友だちに対する思いやりを、幼児どうしで求めあうようになるまでには、どんな段階があり、どういうように展開されるであろうか。そんな時教師はどこで、どのように幼児に援助していくべきなのだろうか、いろいろな決断に迫られるのであるが、そのようなたびにいろいろと迷うのである。

そこでYの行動について、代表的な日をおって、実践のあとをふりかえってみたい。

四月十二日

Yはブロックキャップを使ってひとりでなにかを作っていたが、そのうちに色紙のコナーより一枚の色紙を出してなにかを折りはじめる。他の幼児は戸外での遊びをしたり、絵本をみたり、教師のあとについていた。Yは色紙をほしい、とか使っ

てもよいのかも聞かず、せつせと折ってクレパスで数字を書きこんでいる。他の幼児にくらべ、Yは目をかがやかせ、なにをはじめようかといつもなにかを求めているような顔つきである。

色紙で作ったものを教師のところへ持ってきて、「先生、どこがええかひいてみて」どうもくじびきらしい。「あ、先生は2やでこれ」そばにあったマジック板が景品なのだろう、二本教師に渡す。そばにいたM子にも、I子にも同じようにひかせている。AやSはYが働きかけても横をむいたままである。別にこれ以上の働きかけはせずにつきつきと友だちのところをまわって、ひとりで満足しているYであった。

六月三日

印刷用のローラーを出して、紙切れを使つてのプリント遊びが始まっている。素材のめずらしさからか五、六人の女児がかわるがわるやっていたが、Yも仲間にはいりこんでくる。「先生こんなより字をきりぬいたら、しんぶんになるやろ」Yは教師の顔をじっとながめて、反応を待っているようだ。教師「そうね、それじゃいいものかしてあげるわ」原紙と鉄筆とガリ版を使つての印刷がはじまる。怪獣の絵がほとんどで、字は「しんぶん」と書かれているだけである。K、Hも「なにしとるの」と側へくる。Y「Hちゃん、ウルトラセブンじゃうずやでかいて」H「うん、

かくわ」

Yはだれがどんなことができるか、少しずつわかってきている。どうやらでき上ったようなので印刷の仕方を教え、あとは幼児だけにまかせせる。印刷が一枚できた時のうれしそうな顔、歓声をあげながらやっている。印刷用ローラーを動かすことに、どの幼児も興味を持っている。

K「Yちゃんばっかせんと、ぼくにもさせて」Kは、Yに対して自分の要求がいえるようになっていく。しかしHはまだいえないのだろうか。YとKの二人が印刷しHは傍観している。M子が一枚ずつできたものをそろえている。教師「Hちゃんはやりたくないの」H「したいけどさあ」K「Hちゃん、ぼくのつきになるやわ」YとKの仲間にHがはいっている。

Y「ぼく、これくばってくるでな」YはHのはいったことで印刷の順番を待たなければならぬので、それがいやなため次の段階の行動に移った。まず先に牛乳ビンのふたのお金をくばり、「新聞一枚十円ですから買ってください」と売りに歩く。Yは自分の要求が果たせないと次の段階を考えようとするのがわかってきたようだ。

六月二十五日

あき箱でおもちゃを作っているY、K、H、Eのグループは十

八台も連ねた汽車や、ひもで操作できるダンブカー、人工衛星、宇宙ステーションなどを作っている。そこに大きなダンボールで自分たちのはいれるロボットを作る相談がもちあがった。Y「Hちゃん、アイスクリームの箱を目にするとええな」H「うん、そらや」K「このフタをボタンにしようか」

Yはいっしょうけんめい空箱の集めてある大きな箱に顔をつっこんで、アイスクリームの空箱をさがしているが見つからない。箱ごとひっくり返してさがしたが空箱は見つからない。すこし離れたところでK子、S子がケーキ作りに余念がない。

あき箱をつみ重ね、肝油の缶をその上にセロテープでとめ、ストローで作ったローソクをたてたり、その他いろいろのデコレーションをつけて、「ハッピーバースディトゥユー」と口づさみながらの製作活動である。きっとその上にもつけるつもりであろうか、アイスクリームの空箱が側においてある。

そこへYが近づいて「Sちゃん、そのアイスクリームの箱かして、これやるで」と小さいキャラメルを箱をかわりに持って話している。S「いや、ケーキの上はまあいいに」Y「ぼくたちのロボットの目でもまあいいもの、Sちゃんたちこれでもええやろ」といってさっさとあき箱を持ってしまった。S子やK子はYにあつとうされてなにもいわず、教師の方へもなにもいってこなかった。

教師はそれにあてはまるようなものをさがしたが見あたらないので、Yに「せっかくだがS子ちゃんたちが作ったのにどうしてとったの」S子やK子に「自分たちのほしいものだったら、どうしてもいやといったらいいのに」といおうとしたが、なにか幼児たちが解決するだろうと思ひ、ながめてみると、Yたちはロボットができて上がったのでそれをKがかぶり、Yがカマボコの板とヒゴで作ったリモートコントロールで操作しながらホールへ大いばりで行進していった。S子やK子もキーキをそのまままで完成させ、ままごとコーナーで犬の誕生会をやっていた。

十月十四日

砂場で木製の汽車や自動車を動かしていた、Y、M、Kの三人は、砂場だけでは満足できず、部屋で使っているレールを持ち出して、運動場へ高架線をくみ出し、すべり台の下や雲梯の下を通してはレール遊びをしていた。N、T、Sもじつとこの遊びを見ているが、YのいっしょうけんめいさにはNたちのいる余地がないのである。そこで教師はホールに全紙大のわら半紙をはり合わせ、六メートル平方ぐらいの大きさにし、墨汁と筆を置いた。

T、N、Sがホールにはいってきて「先生、こんな大きな紙にするの」教師「なんでも好きなもの描いたら」S「ぼく線路かこう」はじめためらっていた三人であるが、描きだすとおもしろ

いのだろう、次から次へ描きはじめた。Sはマジックで駅、乗客、信号などを描く。十時頃、Y、K、Mの三人も外の遊びにきてこの遊びに参加する。こうして次の日も同じ遊びを続けているが、大きな紙も六人で描き出すと、またたく間にいっぱいになる。

Y「先生、もつと紙たして」教師「そうね、いっぱいになったからたしてあげようかな」教師がセロテープで、一枚ずつ紙を貼っていくと、Y「先生、そんなり方ではあかんわ、せんろがいく方へはらんと」紙の形にとらわれずどこからでも線路は続く。大きな紙のまん中から出て横へまがり、平均台の下へも紙をくぐらせたり、とび箱の一段を陸橋にしたたりである。M子やT子は紙をつなぎ、Tは妖怪の国を描いている。このように十五人ほどの参加者でホールいっぱい大きな線路図ができあがり、線路は続くよ」と合唱がはじまる。

このようにYの夢は乗物に託されている。大きくなったら超特急の運転手になるのだそうだ。そこで部屋の片すみにつなど乗物の遊具や切符、腕章などを作る素材、笛などをだしておいた。それを見つけたYは目の色をかえて、つなを持って走りだした。駅もでき、Yはもつぱら運転手であるが、ときどきつかれるとHの切符切りやTのふみきり番と交代している。

はじめは乗客もさつとうして電車も混雑していたが、しだいに

お客さんも減ってきたので、S子やK子の発案でお弁当やお花、アメを駅で売りだした。お弁当はスチロールの空箱にモクメンヤ色紙でごちそうを作っただけのものである。

こんなことから、電車ごっこ以外の遊びをしている幼児も、乗物ごっこに参加するのではないかと思っていたが、売店にみんな集中してしまって、電車はからっぽになってしまったのである。

Yの夢はやぶれてしまった。

Y「お弁当もお花もアメも全部でいくらですか」S子「これみんなで一万円です」Y「そんなんやったら、これ一万円やるでな」S子「でもYちゃん、みんな買うてたらわたしたち売るもなくなってしまうわ」Y「ほんでも、お金やったで、かえるやろ」S子「そやけど」Y「また作ったらええやんか」いっしょうけんめい作ったS子やK子にはずいぶん不服だったのだろう。

はじめ教師は、Yがお弁当やお花がみんなほしくて買ったのだと判断したのだが、Yでは売店の品物を全部買ってしまったら、お客さんはまた自分たちの電車の方へもどってくると思ったのである。Yのこの考えに教師はなにかきどりのようなものを感じ、「Yくん、あなたもS子ちゃんやK子ちゃんのように、いっしょうけんめい作ったものをみんな買われちゃったらおこるでしよ」といおうかと思つた。

S子やK子にも「もつとYくんにはつきりいやといったらどう

かしら」といおうかと思つたし、全部いっしょには買えないという約束をここでしようかとも思つたが、Yの強力な要求であるので、はたしてYに話して、Yが自分の感情に対してすなおになれるかどうか疑問に思つた。そこで教師はYに「お友だちのことも考える方が、もつとおもしろい遊びになるわよ」とひとこといつてみたが、Yはなにかいっぶんがいっぱいあるといった顔つきで、じつと教師の顔をながめていた。

遊びにいっしょうけんめいになって自分の夢を果たそうとする、他の幼児がどうなるかということは、眼中になくなってしまふYである。

十一月十一日

S子が色紙で複雑な手り剣を作り出した。それを見てH、K、T、Sたちが「僕たちにも作ってほしい」といつている。S子は色紙をコーナーから出してきては、家で母に教わつた通りに折り、とても満足そうである。

S子「作ってほしい人は一例に並んでください」

Yはいつても、なんでも自分で作れるのであるが、きょうはどうしてもできないので、友だちのうしろに並んでいる。Yの番になつたとき、S子「Yちゃんには作つたらんに、いつてもずるいことするもん」Y「そんなことしやへんのに」S子「それでも一学期

の時、箱とっていったやんか」Y「そんなことしやへんもんな、Hちゃん」HやKに同意を求めるがみんなだままっている。

YはどうしてもS子が作ってくれないし、他の友だちは同情してくれないからか、Y「もうそんないらんわ、HちゃんやKちゃんもS子ちゃんにそんないわれたらどんな気がする」となき顔をしながらいう。やっと他人を受け入れなければといった気持ちが少しわかったような気がする。

十一月二十二日

大きな自動車のタイヤ七個を使って八、九人のグループで遊んでいる。七個同じ方向につらねて並べ、そこをとんだり、まん中の一個をたててその間をくぐったりなど、いろいろのルールを作って遊んでいたが、タイヤの大きさが少しずつちがうのでうまくとべたのから、順番に前へ並べるといった、タイヤの移動で変化をつける遊びがはじまった。だんだんタイヤを移動させていくうちに、S子やM子のやっている学校ごっこの方の場所にはいらないうと遊びが続かなくなってしまう。KやHはS子やM子のせつかくならべた椅子を無視してタイヤを移動させている。

この時Yは「S子ちゃんやM子ちゃんがかわいそうやで、もう一回はじめからやり直ししように」と発案し、HやKをなだめてこの続いていた遊びを中止してしまった。M子やS子も「もつと

むこうでして、わたしたちが先からしとったんやに」と大声でいっていた。

今までずいぶんのまわり道ではあったが、教師から解決を与えず、いつ幼児たちどうしの解決がえられるのかと待っていたのであるが、これには多くの問題点が含まれていると思われる。

(反省と考察)

S子にはしんぼうと勇氣の経験であり、Yには自分で発見した友だちとのかわりあいの経験であった。しかしYの意欲的な創造的な夢は十分果たされ、Yの感情は受容されたが、それに対するS子やその他の幼児の感情はどうであろうか。Yの意欲がならんらかの形でそこなわれてはとか、S子やその他の幼児たちが、自分たちでYにかかわりあおうという意欲をおこさせるようにといった教師の念願はこれでよかったのか。

Yに対しても教師からある程度、制限されたり、もつと積極的に方向を示してもらえないような援助をされた方が、もつとYの情緒の安定がはかれたかも知れないし、Yもそれを待っていたのではなからうか。

教師の表面的なテクニックでなにごとも解決するのはよくないが、六月の空箱の例では、まだ自分たちで解決する発達段階ではなかつたらうし、十月でも自分たちで解決できず、もつと積

極的な援助を与えれば、ここで幼児たちが仲よくなるチャンスだったのに、幼児たちにまかせていたために、YとS子やその他の幼児たちの心のつながりを育てることができなかったのである。この時の働きかけが、また教師と幼児の心のふれ合いを深めてくれたのであろうとも思われる。

自信のなかったAの場合と異なり、家庭でも許容的であって、ある程度教師はなにごとでもうけいれてくれるということのわかっているYには、はっきり理解できる、あたたかい制限を与えることにより、より安定感をもつことができるのではないかと思つた。

三、おわりに

実践をふりかえてみると、幼児の要求をどう理解し、どう受けとめて、幼児にどうして安定感や自信をつけていったらよいかはほんとうにむずかしいことだとつくづく反省させられた。私たちは幼児のもっている親しみある暖たかい感情をうまく受けいれてやれる教師でなければならぬ。ともすると、不用意にいった教師のひとことが、またちょっとした教師の行動が、幼児に失敗感をあじわわせたり、自信をなくさせたりすることも多いのである。

特にこの実践の中で、個々の幼児とのふれあいの中でその幼児

の発達段階を考え、適当な援助の仕方、方向づけのむずかしさに問題点を多くみつけたのである。ある幼児には、ここで助言を与えればより自信をもち、安定感もてるだろう。また他の幼児では、こちらから助言を与えなくとも、自分で解決の糸口を見つけていることができるだろう、といったことが教師の真の愛情で判断できそうな気がする。

こんなことから、私は自分自身にもっとすなおになり、自信をもってありのままの姿を幼児の前にあらわすことによつて、ひとりひとりの幼児が一日一日を満足できるように、よりすばらしい保育を展開したいと願つてやまないのである。

(四日市市立中部幼稚園)

日本保育学会 第22回大会

会期 昭和44年5月17日(土)・18日(日)

会場 日本女子大学

内容 (イ) 研究発表

(ロ) シンポジウム

(ハ) その他

連絡先 東京都文京区目白台二の八の一

日本女子大学文学部教育学科

日本保育学会第22回大会準備委員会

TEL (943) 三一三一 内線 266